公立　秋田県立大学

●プログラムの名称：薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力
──遊びと農業の教育力が若者と社会を結ぶ
●プログラム担当者：生物資源科学部附属フィールド教育研究センター長・教授
小林　由喜也
●キーワード
１．遊び　２．農業の教育力　３．人間力　４．交流塾　５．地域

１．大学の概要

秋田県立大学は、1999（平成11）年４月に「21世紀を担う時代の人材育成」と「開かれた大学として、秋田県の持続的発展に貢献」の２つの点を基本理念として、システム科学技術学部及び生物資源科学部の２学部で創設された。その後、2002（平成14）年４月には大学院システム科学技術研究科、2003（平成15）年４月には大学院生物資源科学研究科、2003（平成15）年10月には地域共同研究センターが開設された。2006（平成18）年４月には公立大学法人として生まれ変わり、生物資源科学部アグリビジネス学科及び生物資源科学部附属フィールド教育研究センター（以下、フィールドセンターという）が設置された。

本学では、2003（平成15）年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されたほか、本プログラムの中心組織となる生物資源科学部では2007（平成19）年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」及び本取組である「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に採択されるなど、大学教育の改革に積極的に取り組んでいる。

２．本プログラムの概要

本プログラムは、若者の人間力向上という社会的要請に応えるため、自然との交流（遊び）と農業の教育力を活かした学生支援を行い、行動力と創造力に富み社会性豊かな人材を育てようとするものである。その内容は、①豊かな自然、農業・農村、それらを教育研究している多様な教員を資源とした「フィールド交流塾」を開設する。②ここでは、学生が様々な動植物に触れ自然のなかで遊び、農業を体験し、感性、探求心、コミュニケーション力、行動力及び創造力を培う。さらに、③農村に出て地域の人々と生活や作業を共に行う中で、農村の伝統や文化に触れる。そして、思いやりの心、達成感、協調性を育み、農村生活への理解を深め、社会性を向上させる。

交流塾での体験は、学生の講義等学修への動機付けを明確にし、勉学意欲を高める。交流塾と学修の相乗効果により、本学部の目指す人間と生物資源との関わりを理解し、未来をたくましく切り開く人材が育つと期待される。

３．本プログラムの趣旨・目的

（１）プログラムの背景・目的

意欲・活力のない学生等が増加した背景には、最近の就業環境や経済環境の悪化という社会的状況もあるが、むしろ、彼らの生い立ちにおいて、かつては当然であった“遊び”の機会、すなわちその過程で感動や発見、挑戦などを経験し、結果として行動力、創造力や社会性を身につける場面が十分に与えられなかったことが、重要な要因と言える。

その結果、社会における存在意義を見出せず、漫然と学生生活を送り、社会への不安な船出を余儀なくされる若者も少なくない。しかし、かつて阪神淡路大震災やタンカーの重油流出事故等の現場では、多くの若者の頑張る姿が見られた。彼らは社会から期待され、存在意義を与えられた時、行動的、創造的、社会的な姿を見せる。課題は、“与えられた時”に限らず、常に自らが社会の期待を発見し、行動する能力を身に付けることである。

本プログラムでは、学生に体験を経て醸成される活力や豊かな感性、主体的な行動力を身に付けられるよう支援する。本学には約200haの圃場と動植物資源や諸施設を擁するフィールドセンターがあり、広い農村も近在している。これらの農業・農村、生物、自然環境の持つ教育力とフィールドセンターの地域交流機能を有機的に活用し、学生がいつでも自由に“遊び”を起点として自己啓発ができる場と支援体制を「フィー

ルド交流塾」として構築し、見る、体験する、交流する、考える、行動することを通して、問題意識やコミュニケーション能力の向上を図り、意欲的で人間力を備えた若者を育成することが、本プログラムの目的である。

（2）本学部における本プログラムの意義

すでに述べたように、本学においても勉学目的が明確でない学生も相当数存在する。また、様々な学生支援策を講じても、なお課外活動などの学生生活の活力が向上しているとは言い難い。このような状況を改善し、既存の学生支援策を有効に機能させるためには、その基礎となる、意欲的に行動できる学生の育成プログラムが必要であると強く認識している。

このプログラムの意義の１つは、学生が意欲的に勉学や課外活動に取り組めるよう支援し、入学時に漠然と抱いていた勉学や就職の目標を明確化させ、ひいては地域の生物関連産業や農業・農村の振興と活性化を図るという本学部の教育目的を達成することである。

２つめの意義は、このプログラムを実施する過程で、教員が教育場面を講義や実験等に限定することなく、学生の人格形成に深く関与することが、結果として教育目的を達成する近道であることを認識する契機とすることである。

４．本プログラムの独自性（工夫されている内容）

（1）学生が“遊び”を起点として“気づき”に近づく「場」の提供

フィールド交流塾には北東北の豊かで厳しい自然の春夏秋冬があり、多様な専門と特技を持つ教職員や地域のサポーターがいる。そして、交流塾の核となるフィールドセンターでは2007（平成19）年度から「人間味あふれる美しい200ha未来農場の創出に関する息の長い実践的研究」を開始している。このなかで、目的に応じてゾーニングし、「教育研究実践エリア」には圃場や温室を、「農村環境・生態系保全エリア」には水路やビオトープを、「地域交流エリア」には交流農園や動

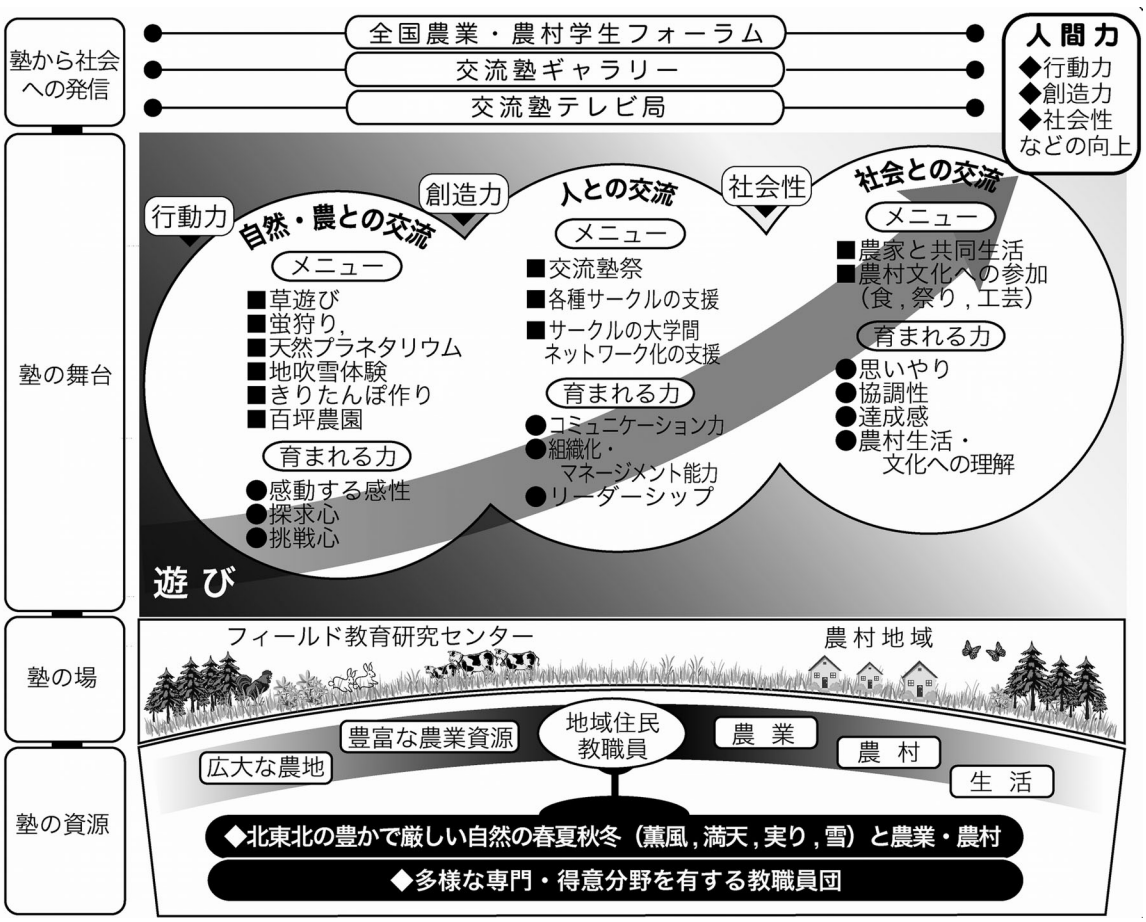

図１　フィールド交流塾の全体像

物広場を配置し、「アグリビジネスエリア」には、調製・加工販売施設を計画している。その他の機械設備を含めると１つの農村集落とも言える環境であり、学生が“遊び”を起点として自由な発想でやりたいことができる素地が幅広くそろっている。

ここで学生たちは様々な“遊び”を通じて行動力、創造力、社会性を高める。そうした「人間力」を高めた若者が、農業系サークルの大学間ネットワークを構築し、そのネットワークを基盤として「全国農業・農村学生フォーラム」を開催することで、活動成果を社会に発信し、自信を持って社会に船出するのが目標である（図１）。

（２）学生の“遊び”を起点とした活動を実現するための多様なメニューの整備

フィールド交流塾では、学生が“遊び”の多様なメニューを整え、自由な発想に基づく“遊び”と“学び”を支援する。メニューは、四季折々の自然や生き物に接するものをはじめ、作物栽培や家畜飼育、食品加工や食文化、伝統工芸や郷土芸能など農村文化に関わるものを具体化し、参加者を募り、場所、指導者、道具、材料などの面で支援する。また、メニューは学生の要望に加え、教職員や地域住民の意向も反映する。実施には、学生の主体性を尊重し、放課後等は自主的な活動、休日は教職員や地域住民なども含めたグループ活動が主となる。フィールドセンターでは毎月特定の休日に地域交流企画を実施する計画であり、これと相互乗り入れして活動を支援する。

（３）活動の発展性と人間力の涵養

本プログラムでは、“遊び”の発展モデルとして３段階を想定している。第１段階では、物事に感動する感性、発見する喜びや達成感、挑戦心や行動力が養われる。第２段階では、１年目の参加者に対するサポート、子供のプレーリーダー役や地域住民との対応、他大学との交流などメニューを運営する役割を担い、組織運営やマネジメント能力、リーダーシップなどの資質が養われる。第３段階では、それまでの過程で得られた感性や人間力を、勉学や就業、社会との関わりなど自身の将来性に生かしていく。なお、こうした活動は、メンタル面のカウンセリング機能を補完し、加えてリフレッシュの機会を提供する。

（４）交流塾への導きと情報発信のための「交流塾テレビ局」の開設

“遊び”の場への導きは、本プログラムの最も重要な点の１つである。そこで、インターネットを活用した「交流塾テレビ局」を開設し、多くの学生が日常的に利用する学内ホールに大型ディスプレーを設置し、交流塾の活動やメニューをビジュアルに発信することによって塾への興味を喚起する。さらに、携帯電話のメール機能を活用した双方向掲示板による受付窓口を設置する。このテレビ局の運営や番組編成は、最終的には塾生スタッフに委ねられ、インターネット等を介した交流塾の情報発信及び情報交換媒体として機能させる。

５．本プログラムの有効性（効果）

（１）本プログラムが学生の意欲や自主性等を育成すると考える理由

本プログラムは、本学の前身である短期大学部（2006（平成18）年度閉学）で、学生の活力低下に対し、学生支援の強化により状況を改善した実績に基づいている。具体的な事例としては、次のものがある。

- 大学祭で学生と教職員が一体となった企画運営を行い、学生200人の学園に4,000人が来場し、大盛況となった。学生はもとより教職員の活力も向上し、大学の存在意義を強く示すことができた（遊びからの意欲向上と活性化）。
- 生物や農業等の教育力に着目した、“遊び”を起点とする「畑っ子」サークル活動では、“自分畑”を創る中で卒論等へ向う意欲が向上し、教職員との人間的な触れ合いの中で、学生の成長が実感された（農業の教育力）。
- 講義等と実社会の関連を理解させるため、農家と連携した「地域実習」を開講したところ、専攻の半数を超える学生が受講する人気科目となった。実習報告書からは、地域の人々との交流が学生の活力向上に役立ったことがうかがえた。また、大学にとっては地域と連携した教育のあり方を学ぶ機会となった（地域が若者を育む）。

本プログラムではこれらの経験を基に、学生の意欲向上支援策を組織的、体系的に実施する。

（２）本プログラムが本学の学生支援全体に与える効果等について

修学面では学修内容を自ら体験することで自発的な学習を促し、本学の特色である「学生自主研究」等への積極的な参加が期待できる。就職支援の面では、交流塾の活動を通じてコミュニケーション能力と自信を

持つことで、各種就職支援プログラムへの積極的な参加が促される。学生生活・課外活動・メンタルヘルス支援等についてはすでに述べた。また、フィールドセンターには地域交流事業で高校生等も参加することから、本学の「高大連携事業」の補完として“学生が行う入学前支援”としても期待できるほか、卒業生が訪れることで、「生涯学生制度」が目的とするアフターケアへの利用も可能である。また、本プログラムは生物や農業の実物教育として、学部全体の教育・研究への波及効果も期待される。

６．本プログラムの改善・評価

本プログラムにおける評価システムは、フィールド交流塾自体の評価と、学生自身が育てた感性・能力についての２つの評価をもって構成される（図２）。

第１はフィールド交流塾への評価で、３つの評価体制をとる。１つめは『塾生活動報告会』における自己及び相互評価である。活動内容や成果について報告するとともに、塾生が自己評価と相互評価を行う。２つめは塾長及び支援教員等で構成される『塾生支援チーム評価委員会』における学生の取組状況評価である。また、定期的に取組の進捗状況をモニタリング評価する。３つめは地域住民・自治体・諸事業体により構成される『交流塾外部評価委員会』による総合評価である。ここでは目標到達度、課題克服対応のあり方、地域に与えた影響について評価する。この結果は次年度の取組に反映する。

第２は本プログラムの目標である学生の行動力・創造力・社会性の向上等の評価である。この評価は塾長、副塾長、アドミッションチーム、教務・学生委員会、就職支援チーム、カウンセラーから構成される『人間力向上評価委員会』で本プログラムの効果を定量的に評価する。

以上の評価システムは、大学における「人間力の発達」を支援する目的を達成するための客観的システムであり、最終的には４年度目のシンポジウムでその評価を総括する。本GP補助期間終了後も、本プログラム及び評価システムは学生支援の重要な柱として継続する。

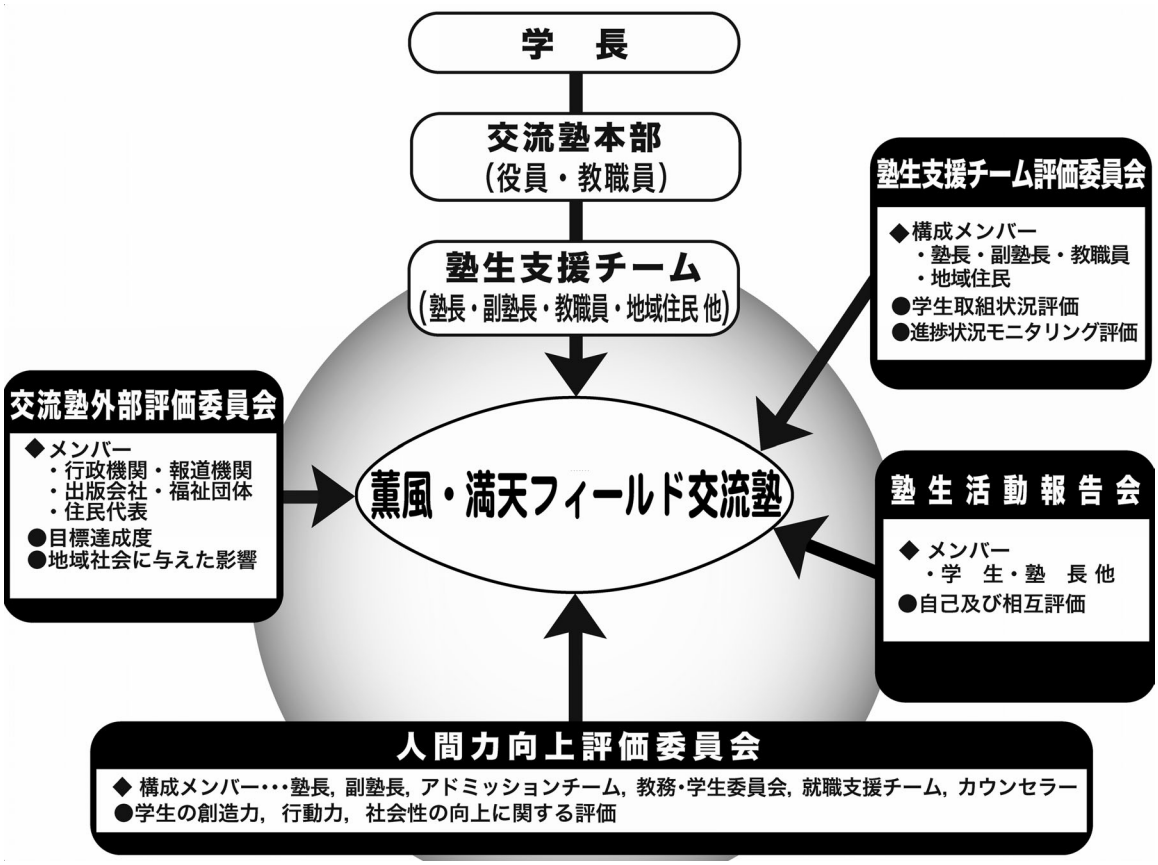

図２　本プログラムの実施・評価システム

７．本プログラムの実施計画・将来性

（１）実施体制

本プログラムを進めるにあたっては、学長、役員と数名の教職員で構成する『交流塾本部』が運営方針や財政状況等を統括する。運営の実務は、塾長（教員）、副塾長（教員・学外者）、フィールドセンター長、支援教職員及び地域の塾支援者からなる『塾生支援チーム』が担う。支援チームは、主に①メニューの選定、②メニューごとの指導者の選任、③塾生の募集、④メニューごとの活動内容設計、⑤活動場所の管理、⑥予算管理（資材調達）を行う。ただし、②については教育本部長と教務・学生委員会を通じて全学的な協力体制をとる。④については塾生と指導者が協議し設計する。活動のなかで学生の意向も反映する。各メニュー活動実施にあたっては、塾生のなかからグループリーダーを選出し、学生主体のグループ活動とする。

（２）各年度の実施計画

取組には運営体制、活動メニュー、施設、情報発信、評価体制の整備が必要である（図３）。

初年度は、学部教職員中心の運営体制をとり、活動メニューは支援チームが作成する。学生向けの広報と情報発信のため「交流塾テレビ局」を開設して塾生を募集し、活動を開始する。施設面では、塾の拠点施設の宿泊・調理機能と交流公園の整備を開始する。評価体制としては『塾生活動報告会』を実施し、『塾生支援チーム評価委員会』を設置する。

２年度目は、支援教職員数を増やし、前年度からの塾生も塾の運営を補佐する。また、大学間ネットワークづくりを始める。活動メニューは塾生の主体的活動により充実する。施設面では、ものづくり工房や交流塾ギャラリーの整備を開始する。評価体制としては、初年度の２つに加え、『交流塾外部評価委員会』と『人間力向上評価委員会』を設置する。

３年度目は、塾の運営において可能な部分は塾生に委ねる。活動メニューは、学生の主体的活動に加え、大学間ネットワークの効果でさらに充実する。また、東北・北海道農業・農村学生フォーラムを開催する。情報発信では、交流塾ギャラリーによる情報発信を開始し、活動成果の刊行準備に入る。また、拠点施設としての機能整備はおおむね完了する。

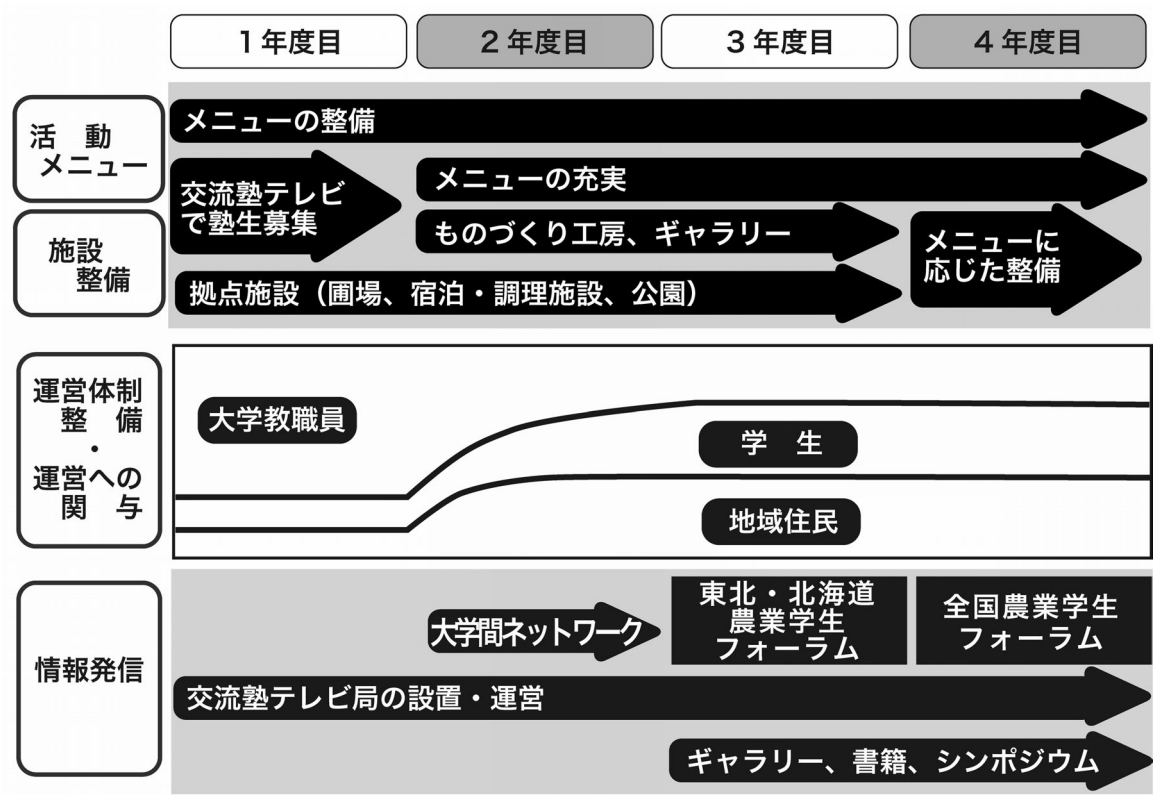

図３　各年度ごとの実施計画

４年度目は、大学間ネットワークと情報発信の総括的な位置付けともなる全国農業・農村学生フォーラムを開催する。また、活動成果を刊行するとともに、成果の公表と総括を目的としたシンポジウムを開催する。施設は活動メニューの必要に応じて整備する。

（３）将来展望

５年度目以降は、４年間で確立した運営体制と評価体制のもとで活動を継続する。学生が行動力、創造力、社会性を高める場として、また、大学間ネットワークの拠点として、さらに、大学と地域の交流拠点として、生き生きと活動が続けられることを目指す。

選定理由

秋田県立大学においては、学生支援を行う教職員の資質向上のためのFD・SD活動に積極的に取り組むなど、包括的な支援の実効性確保のための取組を着実に実施されています。

今回申請のあった「薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力」の取組は、大学が保有する豊かな環境資源を活用し、自然を教育者と見立て、若者の人間力を育むことをねらっているものであり、「人間力向上」という新たな社会的ニーズに対応した地方大学ならではの特色ある学生支援であると考えられます。

本取組は、学生に自然や農業との交流で「遊び」を経験させ、その「遊び」を起点として、人や社会に対する様々な「気づき」を持たせ、最終的に「人間力向上」を図るというものであり、この「遊び」に向けたエネルギーを利用して、様々な「気づき」に到達させようとするところに、本取組のアイディアがあると考えられます。

地域との連携、農学系サークルの大学間ネットワークの構築など、学外との連携も計画されており、この取組の社会的効果が期待され、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。